



山火事原因説あり、結実期に日本海側から低地帯を太平洋側に吹き抜ける冷たい風によるという説あり、羊蹄火山群阻害説あり、降水量制約説あり、気候特性反映食性配置説ありと諸説が出された。氷河期にいったん、南に追いやられたのがいま、少しずつ北に分布域を広げている途中だともみられる。そしてもっと北に分布するミズナラ林とここで競合しつつすみ分けている（ニッチ境界説…渡辺、1985）というのがいまのところ、もっともなはずける見方らしい。

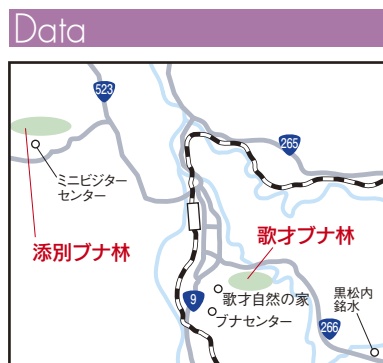
ブナという木は、日本ではあまり重要視されなかった。別の良材が多かったからである。ヨーロッパは家具材などに用いられて優れたデザインのものが高く評価されているが、日本ではお椀などの雑器類にしか使われなかった。最近まで材はほとんど輸出されてきた。並木や庭園に使われることもほとんどなかったが、2005（平成17）年には函館駅前の植え込みにブナが登場する。黒松内町でも市街地や国道並木にブナを採用している。



しむ人たちが四季を通して訪れるようになった。ブナの落葉は繊維が硬いのでなかなか分解しにくく、林内を歩くと地面が、弾力があってまるでクッションの上にいるような感じがする。この堆積した落葉の層が高い保水力を持ち、「ブナの森は緑のダム」といわれ、評価が高まっている。ブナの実（種子）は三角錐型をしているので蕎麦の実に見立ててソバグリ（蕎麦栗）の名もある。これはクマも好物だそうで、結実の多い年にはかなり食べるという。ブナは漢字では「山毛櫟」と書くほか、「掬」あるいは「櫪」とも書く。

ウタサイ（丸山）と云う山あり」（カッコ内筆者）と記している。風栗（ピラニ）はブナのことだとしているがアイヌ名がそうなのかどうか確かではない。パチエラーの辞書にはBeech=Auisanとなっている。

黒松内町には黒松内町ブナセンターがあつてブナとブナ林についての資料を備え、学芸員が情報サービスを行っている。ブナに絞ったビジターセンターとしては日本で唯一のものだ。年間を通していろいろな野外・屋内講座や展示などの企画が立てられている。近くには歌才自然の家という研修室を備えた宿泊施設もある。



●お問い合わせ先
黒松内町企画調整課 Tel. 0136-72-3311
黒松内ブナセンター Tel. 0136-72-4411